傳郭璞『葬書』の成立と變容

宮崎順子

はじめに

傳郭璞『葬書』（『錦囊經』『葬經』とも呼ばれる）は、長きにわたって、風水思想の最も基本的な書物として尊重されてきた。この書は四庫全書にも收錄され、『四庫全書總目提要』（以後『四庫提要』と記す）において長文の解題がなされたが、その後、この書についての詳細な研究は行われて來なかった[1]。それは風水思想に關する歷史上の記錄が少なく、資料的な制約があったためと推測される。『四庫提要』の記事については、筆者は宋代成立說を始めとして、基本的には妥當な內容であると考えているが、部分的には相違する所もある。小論では、『四庫提要』の記事を議論の前提とした上で、『葬書』の成立年代を推定したい。まず第一章で歷代の書籍目錄を檢討し、郭璞に假託された書籍の發生と流行を見、ついで第二章では、郭璞に假託されたことの妥當性を考えるために、郭璞に關する歷史記述を概觀し、第三章では、『葬書』の主要な四種のエディションを比較して、『葬書』刪定のプロセスを檢討し、最後に『葬書』の成立とその變容を考察したいと考える。その際、筆者がこれまでに成立年代を推定してきた『地理新書』や『塋原總錄』も比較對象として取りあげるが、これらの書物との比較は『葬書』の成立年代確定の上で重要な論據の一つと考えている。なお『地理新書』は北宋初、『塋原總錄』は南宋末から元初の成立と推測している[2]。

さて、『四庫提要』子部術數類の『葬書』の解題には次のように言う[3]。

葬書一卷

舊本は晉の郭璞撰と題す。（中略）漢書藝文志形法家、始めて宮宅地形を以て相人相物の書と竝び列す。則ち其の術は漢自り始めて萌す。然れども尙お未だ專ら葬法を言わざるなり。後漢書袁安傳に、安の父沒し、葬地を訪求す、道に三書生に逢い、一處を指さして、當に世々上公と爲るべし、安、之に從い、故に累世貴盛たり、と載す。是れ其の術、東漢以後に盛んに傳えらる。其の特に是れを以て名を擅にする者は、則ち璞、最も著しきと爲す。璞の本傳を考うるに、璞、河東郭公從り靑囊中書九卷を受け、遂に天文五行卜筮の術に洞ずるも、璞の門人趙載は嘗て靑囊書を竊み、火の焚く所と爲る、と載す。其の嘗て葬書を著せりとは言わず。

唐志に葬書地脈經一卷、葬書五陰一卷有るも、又た璞の作る所と爲ると言わず。惟だ宋志のみ璞葬書一卷有りと載す。是れ其の書は宋自り始めて出ず。其の後方技の家、競いて相い粉飾し、遂に二十篇の多き有り。蔡元定は其の蕪雜を病み、爲に十二篇を刪去し、其の八篇を存す。吳澄は又た蔡氏の未だ蘊奧を盡くさざるを病み、至純なる者を擇んで內篇と爲し、精粗純駁相い半ばする者を外篇と爲し、粗駁にして當に去るべきも姑く存する者を雜篇と爲す。新喩の劉則章、親しく之を吳氏より受け、之が爲に註釋す。今此の本の分つ所の內篇外篇雜篇は、蓋し猶お吳氏の舊本のごとくなれども、注の劉氏より出ずるや否やに至りては、則ち考う可からず。書中の詞意は簡質にて、猶お術士の文義に通ぜし者の作す所のごとし。必ず以て璞の手自り出ずと爲すは、則ち徵信す可き無し。（中略）是れ後世の地學を言う者は、皆な璞を以て鼻祖と爲す。故に書は依託と雖も、終に得て廢す可からざるか。

この『四庫提要』で議論されているのは次の四點である。①葬地の說は前漢に兆し、後漢以降に盛んになったが、當時葬地の術者として郭璞がもっとも著名であった。②しかし『葬書』は郭璞の實作でなく假託である。③書籍目錄上に「郭璞葬書」と見えるのは『宋史』が初出であるので、この書は宋代に著作された。④『葬書』は當初、術數家によって二十篇にまで粉飾されたが、南宋の蔡元定が十二篇を削除し八篇を殘した。次いで元の吳澄が蔡氏の版本をさらに刪定し、純粹な部分を內篇とし、精粗混在する部分を外篇とし、雜駁な部分を雜篇と分類し、最後に劉則章が注釋を付した。

第一章　郭璞に假託された相地書の發生と流行

さて、右の四つの論點の正否を以下で檢討するが、本章ではまず書籍目錄中の郭璞に關する記述を概觀することによって、郭璞に假託された書籍の發生と流行の時期について考察する。

以下、郭璞の著作とされる相地書が採錄されている目錄を時代順に竝べるが、書名だけでなく、解題が付記されているものに關しては解題も記した。書籍目錄の中で明確に郭璞著とされる相地の書籍が現れるのは北宋の『崇文總目』からである。[4]

①『崇文總目』卷四・五行類下（北宋）

『周易括地林』一卷・郭璞撰

北宋の一〇七一年頃に成立した『地理新書』卷第五「筮地吉凶」の項目に『括地林』の引用があり、その末尾に、「右は括地林に本づく。專ら地の吉凶を筮し、內外の宅を參す。古題に郭璞撰と云うも、故書に託するに似たり。或いは鄙俚の文ならん。義辭惡しくして協わざる者は、悉く之を刪去す」とある。[5] 內容は京房易を用いた葬地選擇の術であるが、『地理新書』の時代にすでに郭璞假託と推定されていたことが分かる。この書については第二章でも觸れる。

②鄭樵『通志』卷六十八・藝文略・五行・葬書（南宋・紹興三十一年頃、西曆一一六一年頃成立）

『周易括地林』一卷・郭璞撰、『葬書』一卷・郭璞撰、『撥沙成明經』一卷・郭璞撰、『青囊經』二卷・郭璞撰、『錦囊經』一卷・郭璞撰、『元堂品決』三卷・郭璞撰、『周易穿地林』一卷・郭璞撰、『地理碎金式』一卷・郭璞撰、『八仙山水經』一卷・郭璞等撰。

「郭璞撰」と明記された書物が九部にのぼり、恐らく北宋末から南

宋初期にかけて郭璞に假託した僞作が多數著作されたと思われる。當時郭璞の著作と稱されていた相地書には、易占を利用した土地選擇の書も含まれていた。

③晁公武『郡齋讀書誌』卷第十四・五行類[6]（南宋・乾道六年、一一七〇年頃までに成立）

「『青囊補注』三卷。右、郭璞撰。世々葬書の學を傳うるは、皆な郭璞の右に出ずる者無しと云う。今盛行するは、璞の書多きなり。按ずるに璞傳に母を葬するの事を載す、世々傳うるは蓋し誣ならざるなり（後略）」。「『青囊本旨』一卷。右、撰人を記さず。郭璞の相墓青囊經を演ずるなり」。「『洞林別訣』一卷『尋龍入式』一卷。右、江南の范越鳳、郭璞の記する所の諸家地理書の得失を集め、此の書を爲る。二十四篇。并びに司空珏の尋龍入式歌を附す。」

右からも、南宋の初めには「葬書の學を傳える者で郭璞の右に出るものはない」と稱揚され、郭璞に假託された墓地風水の書が盛行していたことが窺える。

④陳振孫『直齋書錄解題』卷十二形法類[7]（南宋末）

「『八五經』一卷。序に大將軍記室郭璞と稱す。後序に餘は郭公より囊書數篇を受け、此れ一に居る。公戒むるに之を祕するを以てす。丞相王公盡く餘に書を索むれども、餘は公の言を以て之に告げ、免がるるを得、と言う。末に太興元年六月と稱す。蓋し晉の元帝の時。王公とは、導を謂う也。然れども皆な依託なるのみ。其の書は相墓を爲す。八五と作す者は、其れ五行八卦の謂か」。「『狐首經』一卷。名氏を著せず。郭景純序と稱す。亦た依託するなり。胡汝嘉、始めて序して之を傳う。其の文も亦た雅馴、言は頗る理有り。『陰陽備用』中に全載す」。「『續葬書』一卷。郭景純と稱す。鄙俗の依託なり。」

『狐首經』の項目でいう『陰陽備用』とは、臺灣故宮博物院に所藏されている元刊本『胡先生陰陽備用』を指すと思われる。また臺灣國家圖書館の『錦囊經』にも同一の『狐首經』が併錄されている。『狐首經』の內容や言語表現はかなり『葬書』と重なる。

⑤『宋史』藝文志・五行類（元・至正五年、一三四五年成書）

郭璞『葬書』一卷、『易括地林』一卷、『錦囊經』一卷。

以上の書籍目錄の記述から、北宋初に郭璞の著作とされた相地の書は『周易括地林』のみであったが、南宋初の『通志』と『郡齋讀書誌』に著錄された書籍は双方で十二部と增加しており、北宋末から南宋初にかけて新たな郭璞像が形成され、「葬書の學の祖」と見なされるようになっていった樣子が推測できる。また、南宋初にすでに郭璞に假託された『葬書』や『錦囊經』が存在しており、これらの書が現行の書籍と同一であると斷言はできないものの、『葬書』がすでに北宋中に書かれていた蓋然性は高いと考えられる。

第二章　「郭璞相地」の事例

次に、郭璞が相地に關わったとする記事を順に辿り、彼が相地術の始祖と目されるようになった時期を考察したい。郭璞は、六朝文人の中でもとりわけ多くの逸話を持つ人物である。六朝期の說話の中の郭璞像は、まず占筮に精通した文人として固定された後、その悲劇的な死を經、實態を離れて超人的な方術の力を持つ神仙のような存在へと變化したといわれる[8]。本章で述べる、「葬書學の始祖」という新たな人物像も、郭璞の更なる傳說化の一端を示すといえる。

最も早い郭璞の葬地占いの記述は『世說新語』術解篇である[9]。

晉の明帝、塚宅を占うを解す。郭璞の人の爲に葬するを聞き、帝微服して往きて看、因りて主人に問う、「何を以って龍角に葬せしか、此の法當に族を滅すべし」と。主人曰く、「璞云く、此れ龍耳に葬す、三年を出でずして當に天子を致すべし、と」と。帝問う「爲た是れ天子を出すか」と。答えて曰く「天子を出すに非ず、能く天子の問いを致すのみ」と。

『世說新語』の著述された劉宋の時代には、早くも郭璞の葬地占いの逸話が形成されていた。

次に『晉書』（唐・貞觀二十二年、六四六年成書）の本傳を見る。[10]

郭璞、字は景純、河東聞喜の人なり。（中略）古文奇字を好み、陰陽算曆に妙たり。郭公なる者有り、河東に客居す、卜筮に精しく、璞、之に從いて業を受く。公は青囊中書九卷を以て之に與う、是に由りて遂に五行、天文、卜筮の術に洞ず。災いを攘い禍を轉じ、通じて無方を致す。京房管輅と雖も過ぐる能わざるなり。璞の門人趙載、嘗て青囊書を竊み、未だ讀むに及ばずして、火の焚く所と爲る。（中略）璞、母の憂いを以て職を去り、葬地を暨陽に卜す。水を去ること百步許り、人水に近きを以て言を爲す。璞曰く「當に卽ち陸と爲るべし」と。其の後沙漲り、墓を去ること數十里、皆桑田たり。（中略）璞、嘗て人の爲に葬し、帝微服して往きて之れを觀、因りて主人に「何ぞ龍角に葬するを以てす、此法は當に族を滅すべし」と問う。主人曰く「郭璞云く、此れ龍耳に葬す、三年を出ずして當に天子を致すべし、と」と。帝曰く「天子を出すか」と。答えて曰く「能く天子の問いを致すのみ」と。帝甚だ之を異とす。

ここには、『世說新語』の故事に加えて、母を葬った際その土地が將來桑畑となることを豫言した事が記され、この記錄が後に郭璞が『葬書』の著者と目されるに至った遠因である事は明らかである。

ついで『南史』卷三十一張裕傳（唐・顯慶四年、六五九年成立）に郭璞相墓の記述がある。[11]

初め、裕の曾祖澄、父を葬るに當り、郭璞、爲に墓地を占して曰く、「某處に葬らば、年は百歲を過ぎ、位は三司に至るも、子孫蕃せず。某處は、年幾半ばを減じ位は栽（わずか）に卿校なるも、累世貴顯なり」と。澄は乃ち其の劣處に葬す。位は光祿、年六十四にして亡ぶも、其の子孫遂に昌んなりと云う。

『南史』には墓地の選擇が子孫の繁榮を左右する事が明確に記されており、郭璞は相地の術を驅使して一族の將來を占ったとされる。

敦煌文書中にも郭璞の相地術に關する記述がある。スタイン六三四九『易三備』の「郭景純占宅地下盤石湧泉伏尸」では次のように言う。[12]

（冒頭省略）巽下乾上、乾家一世姤、五月の卦なり。世は初にあり、應は四に在り。此の地は錢鐵有り、及び人骨有り。深さ七尺に之を得。此の宅に居得せば、凶、絕世なり。

これは京房易を使った住宅の占いであるが、前述したように、もともと術數者としての郭璞は主に占筮をなす人物と考えられており、『易三備』が郭璞に假託されているのも、その反映であろう。

一方敦煌文書中の、形勢を重んじる形法相地術の文書である『司馬頭陀地脈訣』（スタイン五六四五）には郭璞の名前は見えず、唐代には郭璞は形法相地術の始祖とはみなされていなかったようである。

さらに『太平廣記』（北宋・太平興國三年、九七八年上書）の卷十三では『神仙傳』を引用して次のように言う。[13]

郭璞字は景純、河東の人なり。周識博物にして出世の道鑑有り。

天文地理、龜書龍圖、爻象讖緯、安墓卜宅、微を窮めざるは莫く、善く人鬼の情狀を測る。（中略）晉書に傳有り。

『神仙傳』の著者葛洪と郭璞は同時代の人物であるのに、「晉書に傳有り」とは全く時代が合わず、この一文は葛洪の著作ではなく後代のものと考えるのが妥當であろう。[14]

前掲の『地理新書』（北宋・熙寧四年頃、一〇七一頃成立）卷五「筮兆域」にも「郭景純」の名前がある。[15]

郭景純は盤石湧泉の有るを主さどると云う。（中略）又た云う、世爻は是れ木卦、中に火爻有りて動けば、下に亦た盤石有りと。

これは前掲のスタイン六三四九『易三備』「郭景純占宅地下盤石湧泉伏尸」と類似した文書で、やはり京房易を援用する。

さらに、前述したが、『地理新書』卷五「筮地吉凶」の項には『周易括地林』八十一卦の全文が引用され、末尾に「古題に郭璞撰と云うも、故書に託するに似たり」と記す。

以上のように、北宋成書の『地理新書』中で「郭璞」「郭景純」とあるのは卷五の「筮兆域」と「筮地吉兆」の二項目のみで、いずれも易占に關わる部分であり、『葬書』のような相地術と郭璞は關連づけられていない。

次に、北宋の『春渚紀聞』卷二「張鬼靈相墓術」であるが、ここには張鬼靈という術師が現地を見ずして圖畫のみで墓地の吉凶を正確に占ったという逸話[16]が掲載されており、そこに代表的風水師として、郭璞の名前が擧げられている。張鬼靈の法は明らかに土地の形勢と方位を觀る相地術であり、北宋末には郭璞は相地術の祖と見なされ始めた事が分かる。

さて、南宋に入り、蔡發（一〇八九～一一五二）、もしくはその子の蔡元定（一一三五？～一一九八）著とされる『發微論』には、『葬書』の引用または敷衍と思われる部分が非常に多い。

例えば『發微論』「微著篇」に「經に曰く、氣は風に乘りて散じ、脉は水に遇いて止まる」とあるが、これは『葬書』の諸版本に見られる「經に曰く、氣は風に乘れば則ち散じ、水に界せらるれば則ち止まる」とほぼ同一である。『發微論』の著者は、確實に『葬書』の一本を參照していた。もし『發微論』が蔡發の眞著であれば、『葬書』の初稿本は一一五二年以前に成立していた事になるし、一方もし蔡元定の著作であれば、一一九八年以前に成立していた事になる。

羅大經『鶴林玉露』卷六風水（南宋末・淳祐年間、一二四一～一二五二）には、「郭璞は、本骸氣に乘らば、遺體蔭を受く、と謂う」とある。現行の『葬書』の諸版本に全く同一の文言が含まれているので、羅大經が『葬書』を實見していたことは確實であり、南宋末には『葬書』の少なくとも一本がすでに存在していたと考えられる。

ところで、南宋末の詩人、劉克莊の「郭璞墓」には、[17]

先生數學に精しく、穴を卜すること未だ應に疎ならざるべし
因りて虎鬚を埒りて死し、還た魚腹を尋ねて居る
如何ぞ鬼谷を師とし、却て去りて靈胥を友とせん
此の理　誰に憑りて詰らん、人　方に葬書を寶とす

とある。郭璞が相地の術に卓越していたにも關わらず處刑され、今またその墓が水中にあることへの疑問が述べられているが、「人々はまさしく葬書を寶とする」という。詩において、郭璞の墓は北宋では絶景として詠まれたが、南宋末には占術に精通していながら自らの死を豫測できなかった無常を嘆く內容に變化するといわれる。[18] 南宋末に郭璞の墓のイメージが變化した背景には、郭璞著とされる『葬書』が廣

く流傳していたということが推測され、興味深い。

次に『塋原總錄』（南宋末～元初）の卷四「座穴次序篇第十一」でも「蓋し氣の地に在りては、風に乘れば則ち散じ、風に界さるれば則ち止まる」「全氣の地は當に其の止まるに葬すべし」などと『葬書』を多く引用する。『塋原總錄』はさらに「蓋し地理の法は赤松子青囊の論に原づくも其の經、既に世に亡ぶ。（中略）皆な郭氏葬書なるのみ。故に地理家、尤も宜しく稟くべきなり」とし、『葬書』は地理家が最も受け繼ぐべき書物であるとする。[18]

ついで元代に入り、吳澄（一二四九～一三三三）の『吳文正集』卷一「葬書敍錄」を見る。[20]

葬書は相い傳えて、以て晉の郭璞景純の作と爲す。內外八篇、凡そ一千一百五十八字。世俗の行う所は二十篇有り、皆な後人の增すに謬妄の說を以てす。建安の蔡元定季通は其の十二を去りて其の八を存す。亦た既に之を得るも、然れども其の存する所に就かば、猶お顚倒混淆の失無くんばあらず。惟だ此の本、最も善と爲す。篇、內外に分け、各おの微意有り。雜篇二は、俗本は正書の篇中に散在す。或いは術家の祕嗇し、故に之れを亂すなり。此れ別に篇を爲し、倫類して精しくす。覽る者、焉れを詳らかにせよ。

『葬書』はもと「內外八篇」であったが、後人が謬妄の說を增補して二十篇とした、その後蔡元定が十二篇を削除し、八篇のみ殘した。吳澄がこの本を入手したが、文章が顚倒混亂してはいるものの、最も善本であったので、內篇・外篇・雜篇に分類した、とする。

ついで卷二十三「葬書注序」[21]では、吳澄は劉則章なる人物の『葬書』注釋書に序文を寄せて、以下のように言う。

（冒頭省略）世に傳うる所の葬書は、庸謬の流を被むり、妄りに猥陋の說を增し、以て其の眞を亂す。予は嘗て之が爲に刪定し、至精至純なる者を擇んで、內篇と爲し、其の精粗純襍相い半ばする者を外篇と爲す。其の粗駁にして當に去るべきも姑く之を存する者を雜篇と爲す。縱或（たとい）觀る者の、或いは能く知ること鮮きも、予の用意の密は、則章のみ獨り能く承用し、將に注を爲りて以て傳えんとす。予は之れに謂いて曰く、予の刪定する所、其の蘩蕪を去るに、子は又た其の蘩蕪を增す、可ならんや。注は必ずしも有らざる也、と。則章笑いて曰く、諾、と。乃ち書きて以て遺す。

ここでも吳澄は、內篇・外篇・雜篇に分篇したことに觸れ、さらに劉則章の注について述べている。

『四庫提要』はこの「葬書敍錄」と「葬書注序」を論據として、先に引用したように、「『葬書』は當初、相地の術師によって二十篇にまで粉飾されたが、南宋の蔡元定が十二篇を削除し八篇を殘し、次いで元の吳澄が純粹な部分を內篇とし、精粗混在する部分を外篇とし、雜駁な部分を雜篇と分類し、最後に劉則章が注釋を付した」と記したのであろう。この『葬書』刪定のプロセスは、第三章でもう一度檢討する。

以上の文獻から見ると、郭璞の人物像は、六朝期に占筮に精通した神仙のような人物としての形象が形作られていたが、唐代には易占を使用した相地書の著者とされ、北宋に入って、土地の形勢を重んじる相地術の著者にと變化し、南宋時期には完全に葬書の學の始祖としてのイメージが定着したと言えるだろう。

第三章　『葬書』刪定のプロセス

次に本章では、『葬書』の代表的な四本を比較して刪定のプロセス

を辿ってみたい。四本とは臺灣國家圖書館所藏の元刊本『新刊名家地理大全錦囊經』に含まれている『葬書』（以後A本と表記）、靜嘉堂文庫藏『錦囊經』（同じくB本）、琳瑯祕室叢書所收の『劉江東家藏善本葬書』（C本）、津逮祕書本『古本葬經』（D本）である。[22]『新刊名家地理大全錦囊經』は、『葬書』（A本）と『狐首經』など數書の合冊という體裁を取るが、この『葬書』（A本）が現存する『葬書』の最古のエディションであると考えられる。[23] B本は數書の合冊ではなく、『葬書』だけが收錄されている版本であり、刊行年代は不明である。この版本とほぼ同一の內容を持つ鈔本『錦囊經』が東洋文庫に所藏されているが、もと前閒家所藏の朝鮮鈔本で、書寫年代は不明である。『新刊名家地理大全錦囊經』中のA本『葬書』には、第一篇から第二十篇までが揭載されているのに對して、このB本には、第一篇から第八篇までしか記述がないが、分篇、篇目、文章の配列はほぼA本と同樣である。C本は、明代の儒者の序跋が付され、かつ叢書にも收載され入手しやすいところから、通行の『葬書』の中で最も信賴できる版本とされるものであるが、やはり『新刊名家地理大全葬書』の第一篇から第八篇までの文言しか收錄されておらず、かつ文章の配列や分篇には大幅な異同がある。D本は不分篇で、些少の注釋しか付されていないが、『古今圖書集成』『學津討原』などにも收錄されていて、その名稱から『葬書』の古形を殘すかのようである。

議論が煩雜に涉るため前もって結論から言うと、A本とB本は同一系統、C本とD本はもう一つの同一系統のエディションであると思われる。四者の內、最も分量が多いのはA本であり、二十篇からなる。他の三本はA本の第一篇から第八篇までの文言のみを含む。A本とB本は字句の異同はあるが、文章の配列は同じであることから、明らかに同一系統のエディションである。一方、C本は、內篇四篇、外篇四篇、雜篇上下二篇の十篇に分けられ、D本は不分篇である。かつC本とD本は文章の配列にはかなり相違があるにしても、全體的な構成が似ており、また共通した文字の異同が見られるため、同じ系統に屬すると判斷できる。以下順に內容を檢討しよう。

三―一　『新刊名家地理大全錦囊經』

この書籍の構成は次のようである。なお文頭の番號は筆者が立論の便を考慮して付したものである。

①新刊名家地理大全錦囊經　唐丞相燕公張說注解、宋牧堂居蔡成禹附注。氣感篇第一、因勢篇第二、平支篇第三、山勢篇第四、四勢篇第五、貴穴篇第六、形勢篇第七、取類篇第八

「牧堂蔡成禹辨」「北巖郭氏葬書敍論」「眉山王震坐穴論」

八卦篇第九、取勢篇第十、天光篇第十一、朱雀篇第十二、高低篇第十三、八土篇第十四、復魂篇第十五、藏神篇第十六、惡殺篇第十七、吉宿篇第十八、土形篇第十九、奇儀篇第二十。　右葬書二十篇

②『葬法拾遺』名山枝脈篇一、山水異同篇二、穴法正要篇三、地脈靈應篇四、八山應對篇五。

③『蔡氏地理總說』（淳熙丁未九月巳亥朔の跋。南宋・孝宗期の一一八六年に當る）

④『狐首經』天元篇第一、地元篇第二、人元篇第三、山元篇第四、水元篇第五、（狐首經下）、主元篇第六、勢元篇第七、形元篇第八、葬元篇第九、奇元篇第十。

⑤「狐首經纂要」姑蘇竇端修仲通述

⑥「狐首經鍼石翼說」胡汝嘉

⑦「附黃禪師辨羅經二十四字」

⑧『天涯海角經金書四字』軒轅黃帝撰立、佐官玄女纂成

以上のように多數の文獻が收載されているのだが、ここでは本論文に關係のある冒頭の文獻だけを取り上げて檢討する。

卷頭に「新刊名家地理大全錦囊經、唐丞相燕公張說注解、宋牧堂居蔡成禹附注」との文字があるが、この題目が本書全體の書名であるのか、それとも直後のいわゆる『葬書』部分を指すのか判然としない。ただ、この文獻の篇末に「右葬書二十篇」とあることから、冒頭の文獻は『葬書』A本と見なしてよいと思われる。なお、後世には、『葬書』を『錦囊經』と呼稱するB本のような例も見られる。

A本の第一篇から第八篇までの內容はすべて形勢を重んじる相地術で、「張曰、蔡曰、陳曰、一行曰」として注を付す。「張」とは唐の張說を指し、「蔡」とは宋の牧堂居蔡成禹という人物であるが、この人物の傳記は不明である。もしこの人物が南宋の著名な儒者、蔡牧堂を指すのであれば諱は發、蔡元定の父である。しかし「成禹」と明記するからには蔡發ではなく、別人の蔡氏であったと考えられる。「陳」氏については不明。「一行」は唐代の天文に通曉した僧侶であり、早くから相地術の祖師の一人に假託されてきた。[24]

さて第八篇の末尾には次のような一文が付されている。[25]

郭璞葬書。此れ自り以下は、蔡氏の注解せざる所なり。以て郭氏の本文に非ず、後世依倣して之に托せし者なりと謂う。今併せて蔡氏の去取の議論を錄し、□后、來る者をして攷うる所有ら俾めん。

第八篇と第九篇の閒には三篇の文書が挾まれている。第一の「牧堂蔡成禹辨」[26]では第九篇以下には注釋を付さない理由を「此れ自り以下、郭氏の書に非ず。皆な後人の本文を模倣し、他書を剽竊し、之を增益す。」と述べ、かつ郭璞の時代にはまだ存在しなかった筈の術數が第九篇以下には記述されているとして、第九篇以下は僞書であると結論している。また、一行、泓師、張燕公の序も僞作であるとみなす。

第二の「北巖郭氏葬書敍論」は『葬書』の概要を論述したものであり、ほぼ全篇『葬書』の引用に過ぎない。文末に「紹興辛亥春、北巖居士論」とあり、南宋高宗の紹興元年、西曆一一三一年に書かれたとされているが、この記述に誤りがなければ原『葬書』の成立はこれに遡る北宋頃という事になる。

ついで第三の「眉山王震坐穴論」で穴の重要性について述べた後、『葬書』の第九篇以下が掲載されているが、これより後は付注が一切ない。篇名を列擧し、內容を簡單に紹介する。

八卦篇第九（八卦の各方位に埋葬する吉凶）、取勢篇第十（十種の理想的な土地の形勢。『地理新書』卷十二に同樣の記述）、天光篇第十一（「墳不欲麓、穴下欲深、山不欲高」について解說する）、朱雀篇第十二（水の方位の重要性）、高低篇第十三（理想的な形勢）、八土篇第十四（五行と八卦に配當される各土地の色や性質）、復魂篇第十五（墓の斬草の儀式、『地理新書』卷十四と類似）、藏神篇第十六（葬の日時選擇の法、『地理新書』卷十と類似）、惡殺篇第十七（太陽の十四の凶神。『地理新書』卷十三と類似、步數で墓穴の位置を判斷）、吉宿篇第十八（八龍用日の法、十宿に基づく）、土形篇第十九（五行の各家の土地選擇）、奇儀篇第二十（短文）、右葬書二十篇。

さて、A本の第九篇以下の內容を見ると、第十篇と第十一篇は形勢を重んじる相地術の文書といえるが、それ以外は『地理新書』に見られるような古い相地術を反映していて、前半の第八篇までと確かに整合性がない。また末尾の篇に近づくにつれて一篇の分量が減少してお

り、第二十篇などは三十二文字しかない上、意味も不明確で無理に二十篇にこじつけたような感がある。蔡成禹が言うように、『葬書』は當初第八篇までの分量であり、『地理大全錦囊經』成立までの間に第九篇以下が增補されたと考えてよいのではなかろうか。

三―二　靜嘉堂文庫本『錦囊經』（B本）

B本は、A本の第一篇から第八篇までと語句に若干の相違がある以外、文章の配列はほぼ同じであり、分篇も篇名も同一であるが、冒頭に序文が置かれ、「唐開元十六年九月大丞相燕國公張說謹序」との記載がある。序文中には『葬書』傳世の經緯が記されているが、內容が荒唐無稽に涉り、この序文自體に信憑性はない。

書名に續いて「唐燕國公張說注、僧泓師注、僧一行注」とあり、文中には「張曰」「一行曰」「陳曰」「蔡曰」として注が施されている。A本の張氏・一行・陳氏の付注はおおむねB本にも收錄されているが、張氏注に關してはB本の方が遙かに詳細な注となっており、A本で省略した部分をB本は完全な形で揭載しているようである。蔡氏注については、A本の注の方が詳細で、B本の方が省略されている。これら注の內、張氏の注は、C本の注より前に書かれたことは確實である。何故ならば、C本の鄭謐注の中に、張氏の注が引用されているので、[27] A本の張氏注はC本の注釋以前に存在したものであることが分かるからである。

三―三　『劉江東家藏善本葬書』（C本）

C本は、內篇四篇・外篇四篇・雜篇上下に分篇され、明の洪武四年（一三七一年）の胡翰の序を始め、宋濂、張齊、吳沈の序を付し、書末に洪武三年の鄭謐の跋や、金信、葉儀、徐原など明人の跋を載せる。この鄭謐の跋に、C本が基づいたエディションについての言及があるので、全文を引く。[28]

餘、始めて葬書を劉庶幾より得るに、云く、杜待制の傳うる所なりと。繼ぎて又た王伯昌手錄の孫院判本を得るに、標題の下に、劉江東家藏善本の七字を書く。二者皆な、吳文正公、其の篇の端を識すの文有り、蓋し同じく吳公の刪定せし所に出ると雖も、中間の異處、頗る多し。或いは云く、杜待制は是れ定む所の初本、孫院判本は乃ち晚年に續きて定む者にして、尤も精密爲りと。今、孫本を以て主と爲し、其の杜本の優れたる者は、亦た兼ねて之を取り、用いて訂定を加え、從りて之を釋す。但だ學疏識淺にして、舛謬無くんばあらず。同志の士、吝(おし)まずして之を正せ、是れ望む所なり。洪武三年秋八月望日、鄭謐識す。

この跋文によると、鄭謐は初め、杜待制の所藏を經た本を劉庶幾より得、次いで王伯昌手錄の孫院判本を入手した、とある。かつ、兩本共に吳澄刪定の經過が付記されていたので、鄭謐は、杜待制本は吳澄が最初に刪定した本で、孫院判本は晚年に重ねて刪定した本であろうと推定し、主として孫院判本に依據し、杜待制本を參照した、と記す。なお孫院判本の標題の下にはもとから「劉江東家藏善本」の七字が記入されていたという。

さて、C本の卷頭の書名の後には「草廬先生吳文正公徵刪定、後學金華玄默生鄭謐注釋」と記され、文中には鄭謐の詳細な注を付すが、前述したようにこの注にはA本やB本の「張氏」の注を引用する。また、このC本の本文とA本の第八篇までの本文とは、文章の配列は相異するが、そこに含まれる文言自體はほぼ同じである。

また、C本に付された明の宋濂の序には蔡元定が刪定したとの記述が見られ、「蔡元定」刪定說は吳澄の文章を介して廣まり、明代まで

には定説化されていたと推測できる。

三―四　『古本葬經』（D本）

D本はC本の系統に屬すると考えられるが、その論據としては次の三點が擧げられる。第一に、文章の配列は異なるが、文章の括り方が似ている。例えば、第八篇に關して言うと、兩本とも第八篇前半が一括りになっており、後半が別の一括りとなっている。今、C本とD本の文章が、地理大全『葬書』（A本）の第一篇から第八篇までのいずれの場所に相當するかについて、大概を記すと次のようになる。なお『古本葬經』は不分篇である。各篇の順序のみを表す。

C本	A本の該當部分	D本	A本の該當部分
内篇一	第一篇	不分篇	第一篇
内篇二	第一篇		
内篇三	第二篇		
内篇四	第三篇・第四篇		第二篇
外篇一	第八篇の前半		第三篇
	第六・七篇の一部		第八篇の前半
外篇二	第八篇・七篇の一部		第四篇・第六篇の一部
			第七篇の一部
外篇三	第六篇の前半		第八篇後半
外篇四	第五篇		第七篇の後半
			第八篇・六篇の一部
雜篇上	第八篇の後半		第五篇
雜篇下	第六篇の後半		第六篇の一部・第七篇前半
	第一・二・四・七篇の		

第二に、各篇内の文章の竝び順からも、この二本が同一系統であることが推測される。例えば第八篇は、A本を基準にして數えると全部で三十三條あるのだが[20]、A本の第三十三條から第十條に相當する部分が、C本とD本ではすべて顛倒している。つまり、雙方ともに第三十三條が先に置かれ、第三十二條、三十一條と逆に進み、第十行條まで續く。

第三に、C本とD本に共通する文字の異同が多く見られる。例えば、A本の第一篇第三條の「毫釐之差、禍福千里」という文言はA本・B本のみに含まれ、C本・D本には見られない。

以上の三點から、C本・D本は同一系統のエディションであると考えてよいであろう。

三―五　C本・D本の先後關係

次に、A本・C本・D本相互の、文字の異同、語順の異同、語句の有無を精査し、C本とD本の先後關係を考察したい。それに先立って、A本とC本の關係をもう一度確認しておく。そもそもC本の付注に當たって、鄭謐は、孫院判・王伯昌經由でもたらされたエディション（標題の下に「劉江東家藏善本」と記入があった。以下「孫院判本」と表記）を主とし、さらに杜待制・劉庶幾經由で入手したエディション（以下「杜待制本」と表記）を參照していた。鄭謐は、前者は吳澄の晩年の精密な刪定本であり、後者は初期の刪定本であると推定している。この推定の妥當性については問題も殘るが、鄭謐の時點でA本系統には少なくとも二種類のかなり相違したエディションが存在したことは確かである。

さて、A本C本D本には、全部で七十八箇所の異同が見られたが、

① 三本ともすべて語句が異なるのは十箇所
② A本のみ異なり、C本とD本は同一であるのは三十三箇所
③ C本のみ異なり、A本とD本が同一であるのは十一箇所
④ D本のみ異なり、A本とC本が同一であるのは二十四箇所

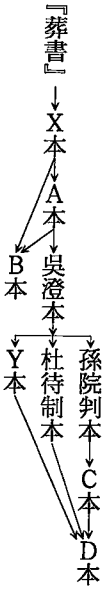
であった。この中で、②のようにC本とD本が同一である場合、C本・D本の方が、A本より明らかに整った形であることが多い。つまり、A本を校訂し、C本・D本の表現に改めたものと推測できる。例えば、A本「也勢原脈」（第二篇第四條）→C本・D本「地勢原脈」、A本「孫滅子死」（第八篇第十二條）→C本・D本「子滅孫死」、といった具合である。

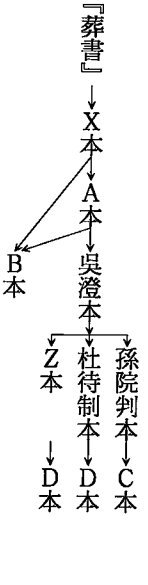
一方、③のようにC本のみ異なる場合、十一箇所の内、七箇所については、實はA本系統のB本ではC本と一致しており、本來④に含むべきものであり、結局③に含まれる例は四箇所しかない。その四箇所も、「缺」と「闕」、「蛇」と「虵」のように意味的にはさほど違わない例ばかりである。

次にD本のみ異なる④の場合であるが、多くの事例で、語句は違っていても意味内容は殆ど同じであったり、正否の判斷が難しかったりしており、明らかにD本のみが正しいと判斷できる事例は一例も見られない。例えば、A本・C本「五氣」（第一篇第一條）→D本「生氣」、A本・C本「夫」（第六篇第三條）→D本「蓋」とする。

なお①のように三本とも相違する十箇所の内、四箇所はB本ではA本とC本が一致し、實は④に含まれる。殘りの六箇所について見ても、D本の語句が適當であると思われるものは一例もない。

以上の事から、A本・B本・C本・D本の先後關係を類推すると、二通りの道筋が考えられる。試みに次に圖示するが、吳澄本までは同じ道筋を辿る。つまり、まず原『葬書』が書かれ、ついで張說・一行・陳氏の注が付され（X本と表記する）、蔡成禹が刪定し（A本）、さらに吳澄が刪定するところまでは共通である。なお、孫院判本や杜待制本が吳澄の刪定本そのものであるか否かは明確ではないので、吳澄本とは別に項目を立てた。





まず、Iの場合であるが、C本・D本が妥當な語句を同じく含み、A本のみ異なる語句が最も多いことから、吳澄本系統を經てC本・D本が成立したと推測される。またD本のみが異なりA本・C本が同一である場合が次に多かったが、A本・C本からD本への改定については、緊要ではない語句の變化が殆どであることから、Iのように、吳澄本系統の孫院判本をC本が校訂し、更にD本が改定した事が推定できる。この場合、二本が一致してA本と異なる部分は、吳澄の刪定を引き繼いだものといえる。ただ、③のようにA本とD本が一致し、C本だけが異なる語句が少數ではあるが存在したことと、またC本とD本とは文章の順序が大幅に異なることを考慮すると、D本がC本以外の版本（Y本と表記）をも參照していたと考えねばならない。このY本は杜待制本である可能性もある。ただ、Iの場合、D本が語句的に

はC本を底本としつつ、一方文章の配列は他の本に従ったという奇妙な事になってしまうため、實際にはⅠの道筋を辿った可能性は低いと思われる。

次にⅡのように、C本は孫院判本を、D本は杜待制本をそれぞれ底本としたという道筋も想定可能である。もし鄭謐がいうように杜待制本が吳澄の初期の刪定本であり、孫院判本が晩年の本であると假定すると、D本がより古い形を受け繼ぎ、C本はそれより後に發生したエディションの系統ということになる。一方、D本が杜待制本ではなく別のエディション（Z本と表記）を底本としたと想定することもでき、この場合はC本・D本の先後關係の判定は難しい。Ⅱの場合、C本・D本の一致部分は、やはり吳澄本を引き繼いだと考えられる。なおB本については、語句と文章の順序の兩方がA本の第八篇までとほぼ一致し、かつ蔡氏の注も付すことから、A本以降の本であると思われるが、張氏注をより完全な形で殘しているので、A本以前の版本（X本）も參照していたと推測される。結局、C本とD本の先後關係については、Ⅱの場合のようにD本が先行していたか、または判定不能、ということになり、現段階では確實な判定は下せない。

以上をまとめると、A本（『新刊名家地理大全錦囊經』）とB本（東洋文庫『錦囊經』）、C本（『劉江東家藏善本葬書』）とD本（『古本葬經』）は各々同一系統の『葬書』であり、『葬書』のエディションは次のようなプロセスを辿った。

①まず、原『葬書』に一行や張說などに假託された注釋が付けられた（X本）、②流傳の中で八篇に分篇され、更に十二篇が創作されて付け加わったものを蔡成禹が整理し、もとの八篇のみを殘して新たに注釋を施した（A本）。③B本はA本を引き繼ぎ、かつA本では省略した形で記載されていた張說の注を元來の完全な形に戻した。④元の吳澄は、A本に依據して文章を竝べ替え、かつ內・外・雜篇に分篇した。⑤明代には、鄭謐の依據した孫院判本や杜待制本など、數種類の吳澄系統のエディションが存在し、C本は孫院判本を底本とし、D本は杜待制本もしくは他のエディションを底本とした。

おわりに

以上、『四庫提要』の議論を出發點として、まず第一章で歷代の書籍目錄を檢討し、ついで第二章で郭璞が相地の術を行ったとされる記事を概觀し、第三章では、『葬書』の主要な四種の版本を比較し、刪定のプロセスを檢討した。

書籍目錄上からも、歷史記述の上からも、郭璞が土地の形勢を重んじる相地術の祖と目されるようになったのは北宋以降であったといえる。『四庫提要』に述べられていた通り、原『葬書』が北宋に成立した蓋然性は高いと思われる。ただ、南宋の著名な儒者である蔡元定が刪定に關わっていた事實はなく、別の蔡姓の人物である蔡成禹が『葬書』を整理し、十二篇を削除して八篇としたのであった。

また、第三章で見たように、現行の『劉江東藏善本葬書』や『古本葬經』は、元の吳澄の校訂を經たエディションの系統であり、『新刊名家地理大全錦囊經』系統の版本との先後關係については、該書系統の注釋がより古い注釋であると思われることから、その系統がより古いエディションであり、『劉江東藏善本葬書』や『古本葬經』はより新しいと考えられる。また、『劉江東藏善本葬書』と『古本葬經』の先後關係は、『古本葬經』がより古いか、判定不能ということになり、現段階では確定することは難しい。このエディションの變遷について

は今後、他の版本との比較、また内容面からも考察してみたいと考えている。

注

(1) 水口拓壽「風水説における『氣』思想の畫期―『劉江東家善本葬書』をめぐって」(『東方宗教』第九四號、一九九九年十一月)でも、成立は宋代と見なしている。

(2) 「宋代の風水思想―『地理新書』を中心に」『關西大學中國文學部會紀要』第二十四號、二〇〇三年三月、「元刻本『塋原總錄』の書誌的考察」(『東方宗教』第一〇四號、二〇〇四年十一月)

(3) 『四庫提要』子部術數部「葬書一卷。舊本題晉郭璞撰。(中略)漢書藝文志形法家、始以宮宅地形與相人相物之書竝列。則其術自漢始萌。然尚未專言葬法也。後漢書袁安傳、載安父沒、訪求葬地、道逢三書生、指一處、當世爲上公、安從之。故累世貴盛。是其術盛傳於東漢以後。其特以是擅名者、則璞爲最著。考璞本傳、載璞從河東郭公受青囊中書九卷、遂洞天文五行卜筮之術、璞門人趙載嘗竊青囊書、爲火所焚。不言其嘗著葬書。唐志有葬書地脈經一卷、葬書五陰一卷、又不言爲璞所作。惟宋志載有璞葬書一卷。是其書自宋始出。其後方技之家、競相粉飾、遂有二十篇之多。蔡元定病其蕪雜、爲刪去十二篇、存其八篇。吳澄又病蔡氏未盡蘊奥、擇至純者爲內篇、精粗純駁相半者爲外篇、粗駁當去而姑存者爲雜篇。新喩劉則章親受之吳氏、爲之注釋。今此本所分內篇外篇雜篇、蓋猶吳氏之舊本、至注之出於劉氏與否、則不可考矣。書中詞意簡質、猶術士通文義者所作。必以爲出自璞手、則無可徵信。(中略)是後世言地學者、皆以璞鼻祖。故書雖依託、終不得而廢歟。」

(4) 『新唐書』卷五十九・藝文志三には『郭氏五姓墓圖要訣』という書名が見える。五姓法を用いて墓の吉凶を判斷する術數であると考えられる。「郭氏」とのみ記して、「郭璞」著とはしていないが注目される。

(5) 『地理新書』卷第五「筮地吉凶」の項目「右本括地林、專筮地吉凶、參內外宅。古題云、郭璞撰、似託故書、或鄙俚文。義辭惡而不協者、悉刪去之」。

(6) 晁公武『郡齋讀書誌』卷第十四・五行類「『青囊補注』三卷、右郭璞撰。世傳葬書之學、皆云無出郭璞之右者。今盛行多璞書也。按璞傳載葬母事、世傳蓋不誣矣。(後略)」「『青囊本旨』一卷、右不記撰人。演郭璞相墓青囊經也」。「『洞林別訣』一卷『尋龍入式』一卷。右江南范越鳳集郭璞所記諸家地理書得失爲此書。二十四篇。并司空珏尋龍入式歌附」。

(7) 陳振孫『直齋書錄解題』卷十二形法類「『八五經』一卷序稱大將軍記室郭璞。後序言餘受郭公囊書數篇、此居一。公戒以祕之。丞相王公盡索餘書、餘以公言告之、得免。末稱太興元年六月、蓋晉元帝時、王公謂導也。然皆依託爾。其書爲相墓。作八五者、其五行八卦之謂歟」。「『狐首經』一卷不著名氏。稱郭景純序。亦依託也。胡汝嘉始序而傳之。其文亦雅馴、言頗有理。陰陽備用中全載」。「『續葬書』一卷稱郭景純。鄙俗依託」。

(8) 大平幸代「『郭璞』說話の形成」(『中國文學報』第五十九冊、一九九九年)は、郭璞說話の形成を社會的背景から解明する。

(9) 『世說新語』術解篇「晉明帝解占塚宅。聞郭璞爲人葬、帝微服往看、因問主人、何以葬龍角、此法當滅族。主人曰、璞云此葬龍耳、不出三年、當致天子。帝問、爲是出天子邪。答曰、非出天子、能致天子問耳。」

(10) 『晉書』郭璞傳「郭璞字景純、河東聞喜人也。(中略)好古文奇字、妙於陰陽算曆。有郭公者、客居河東、精於卜筮、璞從之受業。公以青囊中書九卷與之、由是遂洞五行、天文、卜筮之術、攘災轉禍、通致無方、雖京房管輅不能過也。璞門人趙載嘗竊青囊書、未及讀、而爲火所焚。(中略)璞以母憂去職、卜葬地於暨陽、去水百步許。人以近水爲言、璞曰、當卽爲陸矣。其後沙漲、去墓數十里皆桑田。(中略)璞嘗爲人葬、帝微

服往觀之、因問主人、何以葬龍角、此法當滅族」。主人曰、郭璞云此葬龍耳、不出三年當致天子也。帝曰出天子邪。答曰、能致天子問耳。帝甚異之」。

(11) 『南史』張裕傳「初、裕曾祖澄、當葬父、郭璞爲占墓地、曰「葬某處、年過百歲、位至三司、而子孫不蕃。某處、年幾減半、位裁卿校、而累世貴顯。澄乃葬其劣處、位光祿、年六十四而亡、其子孫遂昌云」。

(12) スタイン六三四九『易三備』「郭景純占宅地下盤石湧泉伏尸」「(冒頭省略)。巽下乾上、乾家一世姤五月卦、世在初、應在四、此地有錢鐵及有人骨、深七尺得之、居得此宅、凶、絶世」。

(13) 『太平廣記』卷十三「郭璞字景純、河東人也。周識博物、有出世之道鑑。天文地理、龜書龍圖、爻象讖緯、安墓卜宅、莫不窮微、善測人鬼之情狀。(中略)晉書有傳」。

(14) 餘嘉錫『四庫提要辨證』の葬書の解題でも『神仙傳』ではないとする。

(15) 『地理新書』卷五「筮兆域」「郭景純云、主有盤石湧泉、(中略)。又云、世爻是木卦、中有火爻動、下亦有盤石」。

(16) 北宋『春渚紀聞』卷二「張鬼靈相墓術」「張鬼靈、三衢人、其父、使從里人學相墓術。忽自有悟見、因以鬼靈爲名。建中靖國始、至錢塘、請者踵至。錢塘尉黄正一爲餘言、縣令周君者、括蒼人、亦留心地理、具飯延欵。謂鬼靈曰、凡相墓或不身至、而止視圖畫、可言剋應否。鬼靈曰、若方位山勢不差、合葬時年月、亦可言其粗也。因指壁間一圖、問之。鬼靈熟視久之曰、據此圖、墓前午上一潭水甚佳。然其家子弟、若有乘馬墜此潭、幾至不救者、即是吉地、而發祥自此始矣。令曰有之。鬼靈曰、是年此墜馬人、必被薦送、次年登第也。令不覺起握其手曰、吾不知青烏子郭景純何如人也。今子殆其倫比耳。(後略)」

(17) 劉克莊「郭璞墓」「先生精數學　卜穴未應疎。因埒虎鬚死　還尋魚腹居。如何師鬼谷　却去友靈胥。此理憑誰詰　人方寶葬書」。

(18) 關清孝「詠郭璞墓詩小考」(大東文化大學『漢學會誌』四十四號・二〇〇五年)に詳しい。

(19) 『塋原總錄』「座穴次序篇第十一」「全氣之地、當葬其止」「蓋氣之在地、乘風則散、界風界則止。」「蓋地理之法、原於赤松子青囊之論、其經、既亡世。(中略)。皆郭氏葬書而已。故地理家、尤宜稟也。」

(20) 『吳文正集』卷一「葬書敍錄」「葬書相傳、以爲晉郭璞景純之作。內外八篇、凡一千一百五十八字。世俗所行、有二十篇、皆後人增以謬妄之說。建安蔡元定季通、去其十二、而存其八、亦既得之、然就其所存、猶不無顛倒混淆之失。惟此本爲最善。篇分內外、各有微意。雜篇二、俗本散在正書篇中。或術家祕嘗、故亂之也。此別爲篇、倫類精矣、覽者詳焉」。

(21) 『吳文正集』卷二十三「葬書注序」「世所傳葬書、被庸謬之流、妄增猥陋之說、以亂其眞。予嘗爲之刪定、擇至精至純者、爲內篇、其精粗純襍相半者爲外篇。其粗駁當去而姑存之者、爲雜篇。縱或觀者、鮮或能知、予用意之密、則章獨能承用、將爲注以傳。予謂之曰、予所刪定、去其蘩蕪、子又增其蘩蕪、可乎。注不必有也。則章笑曰、諾。乃書以遺焉」。

(22) 前掲の水口氏の論文によると、『葬書』にはおおむね十系統のエディションがある。ここで選んだ四本の內、靜嘉堂文庫本は刊行年代が不明であるが、それ以外は元・明の古版本である。『葬書』の十系統は、すべて、字數や文章の配列といった點で異同がある。

(23) 現存する風水の古版本は、臺灣國家圖書館藏『重校正地理新書』十五卷六冊、金明昌壬子張謙刊本)のみ。元刊本は、臺灣國家圖書館藏『新刊名家地理大全錦囊經』一卷一冊、『塋原總錄』五卷一冊、臺灣故宮博物院藏『塋原總錄』五卷一冊、『胡先生陰陽備用』存卷七～十三、『黃帝周書祕奧』存六卷一冊、北京國家圖書館藏『塋原總錄』五卷二冊、北京大學圖書館藏『重校正地理新書』十五卷など。『地理新書』は續修四庫全書所收、また臺灣の集文書局の單行本もある。『胡先生陰陽備用』は東洋文庫に臺灣本の景照があり、『塋原總錄』は京都大學人文科學研究所に、臺灣本の景照がある。

(24) 宋『崇文總目』に「釋一行『五行地理經』十五卷」、『宋史』藝文志・五行類に「僧一行『地理經』十二卷又十五卷」。また『地理新書』卷二「五姓所屬」・卷三「岡原吉凶」に一行の名前が見える。

(25) 「郭璞葬書。自此以下、蔡氏所不注解。以謂非郭氏本文、後世依倣而托之者也。今併錄蔡氏去取議論、□后俾來者有所攷焉」。

(26) 「牧堂蔡成禹辨」「自此以下、非郭氏之書。皆後人模倣本文、剽竊他書、而增益之。試以一二言之、如曰得一分三、則剽竊珞琭子書。曰五音合宜、則引用五姓葬法、郭氏時、未有此書也。亦未有此法也。（中略）術不成數、文不成章、蓋出於一手、其分析爲二十章亦皆非是。此所以不注解也」。

(27) 例えば、A本第一篇第三條の「木華於春、栗芽於室」のA本注は「張曰、野人藏栗、春栗木華、而家栗之實亦芽。實之去木已久、而彼華此芽。蓋以本性元在、得氣則相感而應。如父母之骨、葬得生氣、則子孫福旺也。」。C本注は「野人藏栗、春栗木華、而家藏之栗亦芽。實之去木已久、而彼華此芽。蓋以本性元在、得氣則相感而應。亦猶父母之骨、葬乘生氣、則子孫福旺也。」とする。

(28) 鄭謐の跋の全文は以下の通り。「餘始得葬書於劉庶幾、云杜待制所傳。繼又得王伯昌手錄孫院判本、標題之下、書劉江東家藏善本七字。二者皆有吳文正公識其篇端之文、蓋雖同出於吳公之所刪定、中間異處頗多。或云杜待制是所定初本。孫院判乃晚年續定者、尤爲精密。今以孫本爲主、其杜本之優者、亦兼取之、用加訂定、從而釋之。但學疏識淺、不無舛謬。同志之士、不吝而正之。是所望也。洪武三年秋八月望日鄭謐識」。

(29) 篇目と條數はA本の『地理大全錦囊經』所收の『葬書』による。

(付記) 小論は、第五十五回大阪市立大學中國學會（二〇〇四年十二月）、ついで第一六五回道教文化研究會（二〇〇五年五月）での研究發表に基づく。諸先生方には貴重なご教示を賜わった。また今回の原稿に關し、懇切に閲讀して下さった佐読の先生方にも深く感謝申し上げたい。